P-6

状態変化自動詞に受身を表す形式が後接するとき
ー韓国語-eci-構文の場合ー

鄭宇鎮（帝京大学 外国語学部）
woojin3229@gmail.com

要旨

本発表では、韓国語の受身を表す形式-eci-（-어지-）が、主体の状態変化を表す自動詞に後接して**次第に程度を増していく主体の変化（尺度的変化）**を表すことを示す。この分析が正しければ、［変化自動詞＋-eci-］の意味は、従来、形容詞に-eci-が後接して主体の「尺度変化」（ユ，ヨン 2017）を表すと言われる場合と意味的に深いつながりがあると言える。このように考えると、主に［形容詞＋-eci-］だけを射程内に入れていた-eci-構文のいわゆる「状態変化」用法に［変化自動詞＋-eci-］も含めて考える方がより妥当であることが分かる。

1. 先行研究の検討

韓国語には、次の(1)a のように主体の状態変化を表す自動詞（以下、変化自動詞）に-eci-（-어지-）が後接し主体の自然発生的な変化を表す場合（以下、［変化自動詞＋-eci-］）がある。

(1) 이 신이［a. **닳아졌다** / b. 닳았다］.　（ウ，イネ 1992：57、訳は発表者）
（［a. talh-**acy**-ess-ta すり減る-**eci**-PST-DEC / b. talh-ass-ta すり減る-PST-DEC[1]］）
「この履き物が［a. すり減ってきた / b.すり減って（その状態が続いて）いる］。」

いくつかの先行研究が、［変化自動詞＋-eci-］と変化自動詞の意味的違いを指摘している（ウ，イネ 1992、生越 2008、円山 2008、2016、石賢敬（ソク，ヒョンギョン）2011 など）。たとえば、ウ，イネ（1992：57）では、(1)a のような［変化自動詞＋-eci-］について「ある状態の始まりあるいは他の状態への変換」（筆者訳）を表す（広義の）「起動」とされ、円山（2008：211、2016：69）では「事態の終結局面を重点的に表す」「到達」として分析されている。これらは、いずれも［変化自動詞＋-eci-］を変化自動詞の表す事象の一部を焦点化した表現として捉えている点で共通する。しかしながら、ウ，イネ（1992）の（広義の）「起動」説における「他の状態への変換」という意味は変化自動詞にも当てはまるのではないだろうか。また、［変化自動詞＋-eci-］には、次の(2)のように雨が次第に弱まってくること（成立の途中段階であること）を表す場合が見られることから、［変化自動詞＋-eci-］が「事態の終結局面」を表すとする円山（2008、2016）の「到達」説は少なくとも(1)a と(1)b の間に見られる意味の違いを十分に捉えられるものではない。

(2) 비가 점점［a. **그쳐졌다**/ b. ??그쳤다］.
（［a. kuchy-**ecy**-ess-ta 止む-**eci**-PST-DEC / b. ??kuchy-ess-ta 止む-PST-DEC］）
「（雨が小降りになったのを見て）雨がだんだん弱まってきた。」の意味で

本発表では、(1)a・(2)a のような［変化自動詞＋-eci-］が**次第に程度を増していく主体の変化（尺度的変化）**を表すことを示す。(1)a は変化主体である靴に生じるすり減るという変化が次第に程度を増していくことを表し、(2)a は変化主体である雨が次第に弱まってくるという変化を表すと考えるということである。

以下、変化自動詞に過去形-ess-（-었-）が後接して表す 2 つの意味を確認したのち（2 節）、［変化自動詞＋-eci-］の意味について考える（3 節）。

[1] ACC（対格）、DEC（叙述）、NOM（主格）、PST（過去）、RES（結果相）

2. ［変化自動詞＋-ess-］の 2 つの意味

韓国語には、主体の変化を表現する動詞（摂取動詞、再帰動詞、移動動詞、変化自動詞など）に過去形 -ess-（-었-）が後接して 2 つの意味を表すことがよく知られている。ひとつは、言語的コンテクストに過去の特定時を表す要素がある場合であり、過去の特定時において変化が成立したことを表す。(3)a は、去年は柿が実る量が少なかったという、過去の特定時に成立した柿の変化を表している。これは他の言語における過去形にも現れる基本的な意味とされるものである。もうひとつは、主体が変化してその状態が発話時にも続いているという、変化の結果状態の持続を表す場合である。(3)b は、過去のある時点において柿が実り、その結果状態が発話時にまで持続していることを表している。

(3) a. 작년에는 감이 적게 열렸다.（yelly-ess-ta 実る-PST-DEC）
「去年は柿があまり実らなかった。」［過去時における変化］

b. 올해는 감이 많이 열렸다.（yelly-ess-ta 実る-PST-DEC）
「今年は柿がたくさん実って（その状態が続いて）いる。」［変化の結果状態の持続］

(3)b において過去形 -ess-（-었-）が表す変化の結果状態の持続という意味は、主体の状態変化が含まれず発話時の状態のみを表すアスペクト形式 -e.iss-（-어 있-）と比較することで明確になる。

(4) （果樹園を経営している人が、今年の作況について語る）
올해는 감이 많이［a. 열렸다 / b. *열려 있다].
（［a. yelly-ess-ta 実る-PST-DEC / b. *yelly-e.iss.ta 実る-RES-DEC］）
「今年は柿がたくさん実って（その状態が続いて）いる」の意味で
（安平鎬 2001：242、訳は発表者、容認性判定は原文のまま）

(4)は果樹園を経営している人が、その年の柿の収穫量について話す場面であるが、過去形-ess-（-었-）は自然に感じられるが、結果状態のアスペクト形式-e.iss-（-어 있-）は不自然に感じられる。これは、果樹園を経営している人は通常柿を育てながら柿に生じる日々の変化を把握していると考えられるため、主体の過去の状態からの変化と、その変化の結果状態を表す過去形の使用は自然に感じられるのに対して、主語の指示対象に生じる変化を前提とせずに現在の状態だけを表すアスペクト形式-e.iss-（-어 있-）と共起すると不自然になるためだと考えられる。

韓国語の過去形-ess-（-었-）の表す 2 つの意味において重要なのは、変化の結果状態の持続（すなわち発話時の状態）を表すか否かにおいては異なるが、いずれも過去のある時点において主体が変化した・変化していることを表すという共通点を有している点である。以下では、主体の変化を表現する動詞に-ess-（-었-）が後接して表すこのような意味は、［変化自動詞＋-eci-］が表す、**次第に程度を増していく主体の変化**という意味と対照的であることを示す。

3. ［変化自動詞＋-eci-］の意味

次は実例から収集した変化自動詞に-eci-が後接する場合である。

(5) 태평양 전쟁이 임박하면서 야구는 차차 열이［a. **식어졌다** / b. ??식었다].
（[a. sik-**eci**-ess-ta 冷める-**eci**-PST-DEC / b. ??sik-ess-ta 冷める-PST-DEC]）
「太平洋戦争が近づくにつれ、野球人気は徐々に冷めてきた。」の意味で（1980.10.3.『中央日報』）

(6) 세종시를 제외한 대전, 충북, 충남 지역은 평균연령이 10 년새 37.1 세에서 43.7 세로

[a.**늙어졌다** / b. ??늙었다].（[a. nulk-**eci**-ess-ta 老ける-**eci**-PST-DEC / b.??nulk-ess-ta 老ける-PST-DEC]
「世宗市を除いた大田、忠北、忠南地方は平均年齢が 10 年の間に 37.1 歳から 43.7 歳に上がってきた」の意味で （2018.10.17.『中央日報』）

(7) 방학동안 아이들은 햇볕에 그을리기도 했지만 많이 자랐고 좀 더 튼튼히 [a. **영글어졌다** / b.??영글었다].（a.yengkul-**ecy**-ess-ta 実る-**eci**-PST-DEC/ b.??yengkul-ess-ta 実る-PST-DEC）
「学校休みの間子供たちは日焼けもしたが、ぐんと成長したし、より丈夫になってきた。」の意味で
（2007.8.13.『韓国日報』）

(5)a は野球に対する熱がある一定期間において（太平洋戦争以降）冷めてきていることを表し、(6)a は平均年齢が 10 年の間に上がってきていること、(7)a は子供が学校の休みの間に丈夫になってきていることを表す。(5)a・(6)a・(7)a は、それぞれ主体に生じる何かしらの変化を表しているが、その変化が過去のある一定の期間において次第に増していくことを表す点で特徴的である。

このことは、(5)b・(6)b・(7)b のように-eci-なしで過去のある時点において主体が変化した、あるいは、していることを表す変化自動詞と共起すると不自然、ないし別の意味になることから確かめられる。(5)b・(6)b・(7)b において無標の変化自動詞が不自然になったり、別の意味になったりするのは、主体の変化の度合いが次第に増していくことを表す［変化自動詞＋-eci-］が用いられるべき文脈において、そうした漸増的変化を表さない無標の変化自動詞が使われているからだと考えられる。

［変化自動詞＋-eci-］と無標の変化自動詞の間に見られるこのような意味の違いは、両者が連続して用いられる場合から確かめられる。(8)は変化自動詞 el-（얼-）「凍る」に-eci-が後接する形式としない形式が連続して用いられている。(8)a のように［変化自動詞＋-eci-］が無標の変化自動詞より先行して用いられると自然に感じられるが、その逆である(8)b は不自然に感じられる。

(8) a. 얼음이 영하로 떨어지면서 얼음이 **얼어졌다**.（el-**ecy**-ess-ta 凍る-**eci**-PST-DEC）
이제는 얼음이 얼었다.（el-ess-ta 凍る-PST-DEC）
「気温が氷点下になって氷が凍ってきた。もうすでに氷が凍って（その状態が続いて）いる。」
（石賢敬（ソク，ヒョンギョン）2011: 75、訳は筆者）

b. 기온이 영하로 떨어지면서 얼음이 얼었다.（el-ess-ta 凍る-PST-DEC）
*이제는 얼음이 **얼어졌다**.（*el-**ecy**-ess-ta 凍る-**eci**-PST-DEC）
「気温が氷点下になって氷が凍って（その状態が続いて）いる。もうすでに氷が凍ってきた。」
（石賢敬（ソク，ヒョンギョン）2011: 75、訳は筆者・容認性判定は原文のまま）

(8)a は［変化自動詞＋-eci-］を用いて水の凍結の度合いが増加していくことを述べてから、変化自動詞を用いて同一の主体が変化し、その結果状態が持続することを表しており、連続する 2 つの文が「変化の過程→変化の結果状態の持続」という通常考えられる事象展開を表現しているために自然に容認されるのだと考えられる。一方、(8)b は変化自動詞を用いて主体における変化の結果状態の持続を述べてから［変化自動詞＋-eci-］を用いて同一主体の変化の度合いが増すことを語っており、連続する 2 つの文が「変化の結果状態の持続→変化の過程」という通常考えにくい事象展開を表現しているため、不自然に感じられるのだと考えられる。

［変化自動詞＋-eci-］に次第に程度を増していく主体の変化という意味を認めれば、次のような種類の変化自動詞が［変化自動詞＋-eci-］に用いられて不自然になる場合も適切に説明することができる。次の(9)は mwut-（묻-）「（NP（場所）に NP（モノ）がつく」や kelly- / nas-（걸리- / 낫-）「（病気に）かかる、治る（完

治する、快癒する)」、ci-（지-）「負ける」/ iki-（이기-）「勝つ」、tochakha-（도착-）「到着する」のように主体の変化を表す自動詞が用いられているがいずれも不自然に感じられる。

(9) a. ??얼굴에 밥풀이 **묻어졌다**.（??mwut-**ecy**-ess-ta つく-**eci**-PST-DEC）
「ご飯粒が顔についた」の意味で（lit. ご飯粒が顔についてきた）

b. ??코로나에 **걸려졌다**.（??kelly-**ecy**-ess-ta かかる-**eci**-PST-DEC）
??코로나가 **나아졌다**.（??na(s)-**acy**-ess-ta 治る-**eci**-PST-DEC）
「コロナにかかった / コロナが完治（快癒）した。」の意味で（lit. コロナにかかってきた）

c. 경기에서 2:1 로［??**져졌다** / ??**이겨졌다**］.
（??cy-**ecy**-ess-ta 負ける-**eci**-PST-DEC / ??iky-**ecy**-ess-ta 勝つ-**eci**-PST-DEC）
「試合で 2:1 で敗北した/勝利した。」の意味で（lit. 試合で 2:1 で敗北してきた/勝利してきた）

d. ??목적지에 **도착해졌다**.（??tochakha-**ycy**-ess-ta 到着する-**eci**-PST-DEC）
「目的地に到着した。」の意味で（lit. 目的地に到着してきた）

(9)がいずれも不自然に感じられる理由は、用いられている変化自動詞が表す意味的特徴を考えることで適切に説明できる。これらの変化自動詞は、いずれも主体に生じる変化が一定の時間において生じるのではなく、一瞬で生じることを表すものである。顔に何かがつくことや病気にかかる・完治（快癒）すること、敗北する/勝利すること、目的地に到着することが成立する（そうでない状態からそうである状態へ変化する）までに一定の時間を要するとは考えにくい[2]。(9)がいずれも不自然なのは、［変化自動詞＋-eci-］に(9)のように当該事象が一瞬で生じることを表す変化自動詞が用いられており、主体の変化の度合いが次第に増していくことを表せないためであると考えられる。

しかしながら、［変化自動詞＋-eci-］には、事象が成立するまでに一定の時間を要すると考えにくい変化自動詞が用いられて自然に感じられる場合も存在する。たとえば、cec-（젖-）「濡れる」の場合、少し濡れるだけでも濡れたと言え、水がかかれば一瞬で濡れたことになるため、当該事象が成立するまでに一定の時間を要するとは考えにくい事柄だが、次の(10)は自然に感じられる。

(10) 예쁜 드레스와 수트가 비에 **젖어졌다**.（cec-**ecy**-ess-ta 濡れる-**eci**-PST-DEC）
「(激しい雨風でガーデンでのパーティーはダメになり）きれいなドレスとスーツが雨に濡れてきた。」
（2023.1.12.『Tistory』）

(10)が自然に感じられる理由は、この文で cec-（젖-）「濡れる」が具体的にどのような事象を表しているかを考えることで理解できる。たしかに、濡れることは、その事象が成立するまでに、一定の時間を要さず一瞬で生じることを表す点で(9)の変化自動詞と同じ意味的特徴を持つが、(10)が表しているのは濡れた後もその濡れた状態の度合いが次第に増していく状況であり、それがこの文を自然なものとしていると考えられる[3]。

---

[2] このような語彙的特徴は、一定の期間を表す表現（あるいは副詞）と共起すると（スロー映像で見ない限り通常は）不自然に感じられることから確かめられる。(9)b の nas-（낫-）「治る（完治する、快癒する）」や(9)d の tochakha-（도착하-）「到着する」には「3 時間かかって」のような表現と共起して自然に容認される場合も考えられるが、その場合は完治する・到着するまでの所要時間を表しているのであって、当該の事象（そうでない状態からそうである状態への変化）が成立するまでかかった時間を表すわけではないことに注意されたい。

[3] malu-（마르-）「乾く」・pi-（비-）「空く」は、乾いたり空いたりした状態になるのに一定の時間がかかる点で cec-（젖-）「濡れる」とは異なるが、そうでない状態からそうである状態への変化を表現するだけでなく、完全に乾くあるいは完全に空くまでの変化の過程、すなわち乾いていく状態や空いていく状態の度合いが増していく状況も cec-（젖-）「濡れる」同様に想定できるため、次のように言うことが可能になっているのだと思われる。

以上の分析が正しければ、次の(11)・(12)に示すように同一の変化自動詞が［変化自動詞＋-eci-］に用いられて、容認される場合と容認されない場合が共存する理由を適切に説明することが可能となる。

(11)　（a. 次第に壁にひびが入るのを見て/ b. 地震で壁にひびが入った時）
금이［a. **가졌다** / b. ??**가졌다**］.
（a. [ka-**acy**-ess-ta 入る-**eci**-PST-DEC / b. ??ka-**acy**-ess-ta 入る-**eci**-PST-DEC]　）
「（次第に）ひびが入ってきた。」の意味で

(12)　（a. 顔全体にニキビがだんだんできた時/ b. 顔に一個のニキビができた時）
여드름이［a. **나졌다** / b. ??**나졌다**］.
（［a. n(a)-**acy**-ess-ta 出る-**eci**-PST-DEC / b. ??n(a)-**acy**-ess-ta 出る-**eci**-PST-DEC］）
「（顔全体に）ニキビが出てきた。」の意味で

(11)・(12)に用いられている変化自動詞は、いずれも当該事象が成立するまでに一定の時間を要するとは考えにくいものである。ひびが入ることやニキビが出ることが成立するまでに一定の時間を要するとは考えにくい。このことから、(11)b・(12)b は、(9)と同じ理由で不自然になるのだと考えられる。しかしながら、同じ動詞が表す事象でも、（一本あるいは複数の）ひびがだんだん入っていくことや、顔全体に複数のニキビが出ることはむしろ一定の時間を要する事象として考えられやすく、そういった事象を表す場合には(11)a・(12)a のように［変化自動詞＋-eci-］が用いられて自然に容認されるようになると考えられる。このように考えると、(11)a・(12)a は cec-（젖-）「濡れる」の場合の(10)と同様に、事象が一旦成立した後に次第に度合いを増していく主体の変化を表すものとして位置づけることができる。

［変化自動詞＋-eci-］の適格性にとって程度の漸増的変化が重要であることは、変化事象が成立後も続くだけでは十分ではないことからも確認できる。次の(13)はそれぞれ発生した事態が持続することを表す pwul-（불-）「（風が）吹く」や o-（오-）「（雨、雪が）降る」が用いられているが、自然な文とは言えない。

(13) a.　*?바람이 **불어졌다**.（*?pwul-**ecy**-ess-ta 吹く-**eci**-PST-DEC）
「（無風状態から）風の吹く状態に変わった。」の意味で（lit. 風が徐々に吹いてきた）
（イ，ジョンテク 2004：133、容認性判定は原文のまま）

b.　*비가 **와졌다**.（*(o)w-**acy**-ess-ta 降る-**eci**-PST-DEC）
「（曇天から）降雨状態に変わった。」の意味で（lit.雨が徐々に降ってきた）
（シン，ウンス 2016：249、容認性判定は原文のまま）

イ，ジョンテク（이정택）（2004：133）とシン，ウンス（신은수）（2016：248-249）では、(13)a と(13)b に用いられている自動詞がそれぞれ自然現象を表すために、-eci-が後接して不自然になると説明されている。しかしながら、この説明は少なくとも、自然現象を表さない(9)が自然現象を表す(13)とともに不自然になる理由について十分な説明を与えるものではない。(13)a の pwul-（불-）「（風が）吹く」と(13)b の o-（오-）「（雨、雪が）降る」では、それぞれ生じた事態は継続するが、風が吹くのを感じ、雨・雪が降るのを観察すれば、それだけで風が吹いた、雨・雪が降ったということになるのであって、そこにおいて漸進的変化を感じる必要はなく、また、風が吹いて雨・雪が降ってから、それが続いたとしても漸進的変化は特に感じられないため、

(a)　（감 잎을）하루 정도 말리니까 덖을 수 있을 정도로 차분하게 **말라졌다**.（mal(u)l-**acy**-ess-ta 乾く-**eci**-PST-DEC）
「（柿の葉を）1 日くらい乾かしたら煎ることができる程度にしんなりと乾いてきた。」

(b)　냉면 그릇은 거의 다 **비어졌다**.（pi-**ecy**-ess-ta 空く-**eci**-PST-DEC）「冷麺の器はだいぶ空いてきた。」

［変化自動詞＋-eci-］に用いられるのに必要な、次第に度合いを増していく変化を表さず、不自然に感じられるのであろう。また、そもそも pwul-（불-）「（風が）吹く」や o-（오-）「（雨、雪が）降る」は主体の変化を表すわけではないことも(13)が不自然に感じられる理由として考えられる。つまり、「雨が降る」ことや「雪が降る」ことは主体に生じる変化を表すというよりも、そうした現象全体の発生として受け取られやすい。また、それぞれの現象の核としての風や雨･雪に注目する場合であっても、いずれも通常持続するのに何らかのエネルギーを要する動的な事態の一種であるために、主体の変化としてではなく、内在的な持続力を持つものの動的な状態の継続として見なすのが自然である（van Oosten 1986：120）。そのため、pwul-（불-）「（風が）吹く」や o-（오-）「（雨、雪が）降る」は、一種の行為自動詞とも捉えられ、［変化自動詞+-eci-］に用いられると不自然に感じられるのだと考えられる。

以上の分析から、-eci-構文における［変化自動詞＋-eci-］は、**次第に程度を増していく主体の変化（尺度的変化）**を表すことが明らかになった。

4. -eci-構文のいわゆる「状態変化」用法をどう捉えるべきか

ユ，ヨン（유연）（2017）は［形容詞＋-eci-］の意味分析を行なっている。そこでは、［形容詞＋-eci-］には、次の(14)のように大きく分けて 2 つの解釈があることが指摘されている。

(14) a. ①「尺度変化」
철수의 피부가 **좋아졌다**.（coh-**acy**-ess-ta 良い-**eci**-PST-DEC）
「チョルスの肌（の状態）がよくなった。」（変化後→??肌がきれい）（ユ，ヨン 2017：34）

b. ②「極性変化」
철수의 얼굴이 **빨개졌다**.（ppalka(h)-**ycy**-ess-ta 赤い-**eci**-PST-DEC）
「チョルスの顔が赤くなった。」（変化後→顔が赤い）（ユ，ヨン 2017：34）

(14)a は主体であるチョルスの肌の状態が前に比べて相対的によくなったことを表すが、変化後の肌の状態がきれいかどうかは必ずしも分からないことから、「尺度変化」（scale change）と呼ばれる。一方で、(14)b は主体であるチョルスの顔が赤くない状態から赤い状態へ変化し、変化後は必ず顔が赤い状態でなければならないことから、「極性変化」（polarity change）と呼ばれる。ユ，ヨン（유연）は［形容詞＋-eci-］にみられる主体に生じる「尺度変化」と「極性変化」という意味を、-eci-が形容詞に後接する場合に限って論じているが、変化主体に生じる尺度的変化の意味が［形容詞＋-eci-］以外にも見られるのであれば、それらの意味的関連性に注目して論じる必要があるだろう。

3 節での分析が正しければ、［変化自動詞＋-eci-］が表す**次第に程度を増していく主体の変化**という意味は、［形容詞＋-eci-］の表す「尺度変化」と意味的に深いつながりがあることになる。つまり、両者は、主体のそうでない状態からそうである状態への変化を表すのではなく、主体の変化の度合いが次第に増していくという意味を表す点で意味的に関連しているのである。［変化自動詞＋-eci-］と［形容詞＋-eci-］の間に見られる意味的関係を図式で示すと次のようになる。

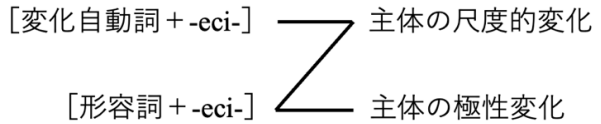

図 1 ［変化自動詞＋-eci-］と［形容詞＋-eci-］の意味的関係

従来、-eci-構文のいわゆる「状態変化」用法に関する分析は、ほぼ［形容詞＋-eci-］の場合のみを対象とす

る場合が多かった（イ，ジョンテク（이정택）2004、円山 2016、ユ，ヨン（유연）2017、パク，ヘジン（박혜진）2017 など）。しかし、本発表の以上の分析が正しければ、-eci-構文のいわゆる「状態変化」用法は、［形容詞＋-eci-］だけでなく［変化自動詞＋-eci-］も含めて考える方がより妥当であるように思われる[4]。

5. おわりに

本発表では、韓国語の受身を表す形式-eci-（-어지-）に変化自動詞が後接して、**次第に程度を増していく主体の変化（尺度的変化）**を表すことを示した。

本発表の分析は、［変化自動詞＋-eci-］と［形容詞＋-eci-］の間に見られる意味的関係を明確に提示できた点、また、-eci-構文のいわゆる「状態変化」用法の見直しができた点に意義がある。また、Haspelmath（1990：34）のいう fientive（本発表の［形容詞＋-eci-］にあたる）において形容詞以外の場合（すなわち［変化自動詞＋-eci-］）が存在する可能性が確認できたという点で言語類型論研究への新たなデータ提供にも貢献している。

北海道方言のラサル構文にも-eci-構文の［変化自動詞＋-eci-］と類似した現象が存在することがすでに指摘されているが（円山 2007、2016 など）、他言語に見られる類似現象との意味の対照分析や、なぜ韓国語には主体の自然発生的な変化を表すのに 2 通りの方法が存在するのかについての考察は今後の課題である。

参考文献

安平鎬（アン，ピョンホ）（2001）「韓国語の「タ」:「hayss-ta（했다）」をめぐって」つくば言語文化フォーラム（編）『「た」の言語学』207-250. 東京：ひつじ書房.／Haspelmath, Martin.（1990）The grammaticalization of passive morphology. *Studies in Language.* 14：25-72.／鄭宇鎭（チョン，ウジン）『ヴォイス形式の多義とその認知的動機付け－韓国語-eci-構文の場合』東京大学大学院 博士学位論文.／円山拓子（2007）「自発と可能の対照研究－日本語のラレル、北海道方言ラサル、韓国語 cita－」『日本語文法』7-1 : 52-68. 日本語文法学会.／円山拓子（2008）「多義語 cita－5 つの意味を決定する 4 つの要因－」研究代表者 生越直樹『日本語と朝鮮語の対照研究II』209-230. 東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば－進化認知科学的展開」研究報告書.／円山拓子（2016）『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京：ひつじ書房.／生越直樹（2008）「現代朝鮮語における様々な自動・受動表現」生越直樹・木村英樹・鷲尾龍一（編）『ヴォイスの対照研究－東アジア諸語からの視点－』155-185. 東京：くろしお出版.／石賢敬（ソク，ヒョンギョン）（2011）『本動詞から補助動詞への文法化－韓国語の〈doeda 構文〉と〈jida 構文〉を中心に－』東京大学大学院 博士学位論文.／Van Oosten, Jeanne.（1986）*The nature of subjects, topics and agents : A cognitive explanation.* Bloomington：Indiana University Linguistics Club.／박혜진（パク，ヘジン）（2017）「'-어지다'의 의미 기능 연구」（-eci- の意味機能研究）연세대학교대학원 석사학위논문.／シン，ウンス（신은수）（2016）「15 세기 'V 아디다' 기원의 합성어 '녹아지다'」（15 世紀 V-a-ti-ta 起源の合成語 nok-aci-ta）『국어학』80：229-258. 국어학회.／ウ，イネ（우인혜）（1992）「용언 "지다"의 의미와 기본 기능- "어/아 지다"의 구문을 중심으로-」（用言 cita の意味と基本機能-e/a cita 構文を中心に）『외국어로서의 한국어교육』17：39-67. 연세대학교 언어연구교육원 한국어학당.／ユ，ヨン（유연）（2017）『한국어 상태변화 구문 '-어지다'와 '-게 되다' 연구』（韓国語状態変化構文-eci-ta と-key.toy-ta の研究）서울대학교대학원 박사학위논문.／イ，ジョンテ（이정택）（2004）『현대 국어 피동 연구』（現代国語の被動研究）서울：박이정.

[4] 鄭宇鎭（チョン，ウジン）（2024）では、［変化自動詞＋-eci-］の意味と、［変化自動詞＋-eci-］と［形容詞＋-eci-］との意味的関連性に注目し、従来用いられてきた「状態変化用法」という分類を「主体変化用法」として再規定している。